

第16編 奄美に自生している植物による染色

第1章 奄美に自生している植物を市販の媒染剤で染色した結果

第15編は、市販している植物による染色の結果であるが、この項は奄美に自生している植物を各媒染剤で染色した結果である。

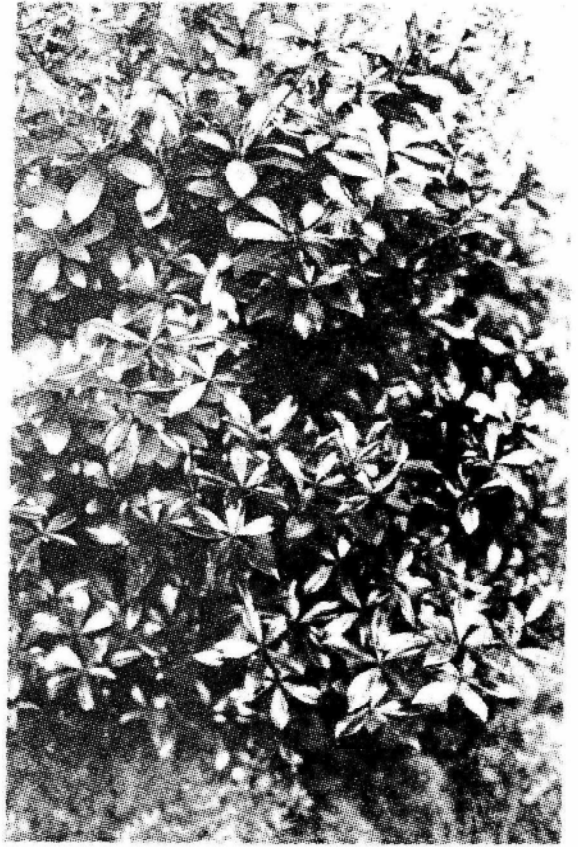
植 物 名	タンニン酸 の含有量	アルミ媒染	鉄 媒 染	染 色 の 堅 牢 度
椎ノ木の生木	0.33%	オリーブ色	濃ネズミ色	汗にやや不堅牢
椎ノ木 製材の不要材	0.24	〃	〃	〃
チンギ	0.55	淡茶色	〃	〃
福木	0.23	黄色	濃オリーブ色	〃
モクマオ	0.97	淡茶色	濃ネズミ色	〃
サクラツツジ	0.3	〃	〃	〃
ハマヒサカキ	0.18	〃	〃	〃
タボギ	0.27	〃	〃	〃
ハハモモギ	0.29	〃	〃	大体堅牢
クチナギ	0.27	オリーブ色	濃オリーブ色	汗、日光にやや不堅牢
サンキラの根	1.54	淡茶色	濃ネズミ色	大体堅牢
芭蕉の根	0.22	〃	〃	〃
ヤマビワ		〃	〃	汗、日光にやや不堅牢
テーチギ	1.92	〃	〃	大体堅牢
カシギ		〃	〃	〃
イジュギ	0.11	〃	〃	〃
ヤマモモ	0.19	〃	〃	〃
クスノキ		〃	〃	〃
ユス		〃	〃	〃
ハジメギ		オリーブ色	濃オリーブ色	汗にやや不堅牢

奄美に自生している植物染料

ア



イ



ウ



ア ヤマモモ ～ 和 名
ヤマモモ ～ 奄美の方言

イ モツコク ～ 和 名
ハアモモギ ～ 奄美の方言

ウ イジュ ～ 和 名
イシユギ ～ 奄美の方言

第2章 奄美に自生している植物を、泥染式に染色する方法

1. ヤマモモ(方言ではヤマモモ)による染色

ア 染液の採取法

細断したヤマモモ60kgに10倍量の清水と炭酸ソーダ70gを加えて、煮沸8時間、煎出して300ℓの染液を採取

イ 原料絹糸

この染色は約20%程度、増量するので、これを計算に入れて、15半ヨミの紬は、35g付き(9.2匁)。13ヨミの紬は、39.4g付き(10.5匁)の絹糸を使用。

ウ 緋加工

2手取り、80番ガス絹糸、4モト締め緋ムシロを作製

エ 緋染色法

締め加工した緋ムシロを、前記によって採取した染液で、下記工程で染色。
(染色工程)

染、染、染、石3g/ℓ、染、染、染、石4g/ℓ、染、染、染、乾、田
染、染、染、石3g/ℓ、染、染、染、乾、田、乾、蒸

オ 地糸染色法

絹糸を前記によって採取した染液で、下記工程で染色。
(染色工程)

染、染、染、石3g/ℓ、染、染、染、石4g/ℓ、染、染、染、田
染、染、染、石4g/ℓ、染、染、染、石4g/ℓ、染、染、染、石3g/ℓ、
染、染、染、乾、田、乾、蒸

(上記染色工程の説明)

染 ~ 煎出液で2分間位、もみ染した後、糸を絞上げる。

石 ~ 石灰水で1分間位、もみ染した後、糸を絞上げる。

乾 ~ 乾燥する。

田 ~ 泥田で染色する。

蒸 ~ 乾燥後、蒸熱1時間処理する。

2. モツコク(方言ではハアモモギ)による染色

ア 染液の採取法

細断したモツコク60kgに、10倍量の水と炭酸ソーダを加えて、煮沸8時間、煎出して200ℓの染液を採取した。

イ 原料絹糸

ウ 緋染色法

エ 地糸染色法

上記、ヤマモモに準じて染色をなす。

3. イジュ(方言ではイジュギ)による染色

ア 染液の採取法

細断したイジュの木、60kgに10倍量の水と炭酸ソーダ70gを加えて、煮沸8時間煎出して200ℓの染液を採取した。

イ 原料絹糸

ウ 緋染色法

エ 地糸染色法

上記、ヤマモモに準じて染色をなす。

4. モツコクとイジュの混合液による染色

この液を同量ずつ混合した液で、上記ヤマモモに準じて染色をなす。

備考

ア この染色は、上記ヤマモモの項で記した染色工程で染色したが、これは一応の基準であるから、目的の色によって染液の採取量や、染色工程を増減して目的の色に染色すること。

イ 又、この染色は泥染のように黒く染色するのではなく、中間色に染色するので、季節や染液の濃度によって、色相や濃度が異なって染色されるので、染液の濃度や染色工程を勘案して、目的の色や好みの色に染色すること。

ウ 緋と地糸は染着が異なり、ひいては色相及び濃度が異なるので、緋を先に染色し、地糸は緋の地色に合うように色合わせ染色すること。

エ 上記(ウ)の理由により、この染色は緋の地色と地糸とは、色が異なるので、横段の色ムラになるので、飛柄は加工しないようにすること。

オ 上記煎出液の採取量でヤマモモが300ℓ、他は200ℓ採取しているが、ヤマモモは煎出液が濃いため染着が早く、緋の十ノ字が切れにくいことや、地糸もムラ染になるので、淡く煎出液を採取して染色した。

カ 草木染を堅牢に、良い染色をするには、染液を淡くして、回数を重ねて、目的の濃度に染色することが、草木染の基本であるから、煎出液の300ℓや200ℓにこだわることなく、各植物によって採取量も増減して、最適な染液濃度及び染色工程で、良い緋及び地色を染色するようにすること。

キ 又、この染色は自然の植物や泥田で染色するので、同じ色を二度染色することは、不可能であるから、原料糸を不足しないようにすること。又、他の原料と混ぜて製織しないよう、1仕切毎に製織すること。

ク 参考までに、上記植物染料の各試験結果は、下記のとおり、

○ 前記によって、煎出した各植物のタンニン酸の含有量

ヤマモモ	0.1906 %
モツコク	0.2958 %
イジュ	0.1183 %
イジュとモツコクの混合液	0.2070 %

○ 日光に対する堅牢度

ヤマモモで染色した糸	5 級
モツコク "	5 級
イジュ "	5 級

○ 汗に対する堅牢度

ヤマモモで染色した糸	4 級
モツコク "	4 級
イジュ "	4 級

○ 洗濯に対する堅牢度

ヤマモモで染色した糸	4 ~ 5 級
モツコク "	4 ~ 5 級
イジュ "	4 ~ 5 級

○ 摩擦に対する堅牢度

ヤマモモで染色した紬	4 ~ 5 級
モツコク "	4 級
イジュ "	4 級
モツコクとイジュの混合液で染色した紬	4 級

ケ この章で上記の植物について記したが、これは下記条件が備わっていることから記した。

- 各堅牢度に対し、染色が堅牢であること。
- 商品価値のある色相が得られること。
- 大島紬として、緋が染色されること。
- 生産反数が多くなっても、この植物があること。

コ したがって、このほかの植物で染色する場合も、上記の条件によって染色することである。色が良いからと直ちに染色することなく、合成染料のように堅牢な植物を選定して染色することである。又、製品になってから、返品苦情があった時は、染色者はその責任を負うことを頭において、染色することである。

第3章 草木化染紬の染色

ア この紬は合成染料で染色した後、さらに植物染料で染色する複合の染色である。

このように染色する理由は、合成染料独特の艶がなくなり、草木染風の色目となり、又植物染料やタンニン酸、さらには泥土の鉄塩類が染着するので、草木染のような地風になり、さらに緋ヒビも植物染料ではほんの少し汚染されるので、従来の色大島と異なった紬が生産されることから、この方法がおこなわれる。

イ 合成染料による緋ムシロ染色

白糸で整経、緋締めした緋ムシロを合成染料で、目的の色又は好みの色に、緋の地色を染色する。これは、前記第6編の第2章の合成染料緋染に準じて染色する。この色は消費者が好む色、又は問屋の要求する色を染色して良い。但しこの色は、後の草木染や泥染で、どの程度くすむかを考慮して、染色することが必要である。

ウ 植物染料による染色

上記によって染色した緋ムシロを、前記第2章によって採取した、イジュ等の染液で下記により染色する。

(染色工程)

染、石5g/l、染、染、染、石5g/l、染、染、染、乾、田

(上記工程説明)

染 ~ 合成染料で染色した緋ムシロを、イジュ等の染液で約1分間、常温液でもみ染する。

石 ~ 石灰水でもみ染する(石灰は水1lに5gの割)

乾 ~ 泥田で泥染式に染色する。

備 考

1. 上記の染色工程は、一応の基準ですから、先に染色した地色を考慮し、目的の色や好みの色に染色するよう、工程を増減して染色すること。又後に染色する植物染料の濃度や色を考慮して、合成染料は染色すること。
2. このように染色した色は、先に染色した合成染料が堅牢であれば、合成染料と同等の堅牢度が得られる。
3. この染色は、先に染色する合成染料染色が不良でない限り、後の草木染では失敗は、特別のほかはない。
4. このように染色した紬は、色大島であり、草木染とは見なされない。

※ 合成染料で染色した黒色の艶消し法

合成染料で染色した黒色も、この方法で染色すると艶が消える。

但し、これを染色する植物は、シャリンバイ液が良い。

第4章 泥染した絣を総解きし揚粹した絣の草木染法

この染色は、泥染した絣を総解きし、揚粹した絣糸を植物染料で、染色する方法である。この染色は、ムラ染になり易いので、揚粹した絣のくくり目は、ゆとりがあるようにくくり、又、糊は完全に洗い取ること。

ア 媒 染

明ばん20%溶液に、上記によって糊抜きした絣を20～30分～2時間操作した後、浸漬して媒染した後、水洗いした後染色に移る。

イ 植物染料の染液の調製法

○ 植物染料が原木の場合

原木は細断した後、10倍量の水で煮沸して染液を抽出し、適度な濃度の染液を調製する。

○ 植物染料がエキスの場合

エキスは染液を煮詰めたものであるから、染色物の5～10%のエキスを適量の水に溶解して染液を調製する。

ウ 染色法

染色する水量は、可染物の20倍量に先に抽出、又は溶解した染料を適当量、染色槽に入れ、絣を振り付け染やもみ染して、ムラ染を防止しながら、昇温煮沸して染色する。この場合、目的の色に染色されない時は、先の媒染を繰り返すか、又は抽出した染液を追加して、目的の色に染色し、煮染か蒸熱処理して水洗する。

第5章 合成染料で染色した絣を総解きし、揚粹した絣の草木染法

この染色は、前記第4章のように染色するが、この染色で異なる点は、媒染や草木染で、先に染色した合成染料が色落ちして、絣の色を変色させないようにすることです。したがって、絣の汚染を防ぐには、絣ムシロの地色を染色する染料は、特に堅牢な染料で染色し、さらに蒸熱処理してから、この草木染をすることが必要である。次に、この染色で、媒染や草木染中先に染色した合成染料が色落ちする時は、これで絣を汚染させないように、媒染液や染料液を取り替えて、絣に草木染をすることです。染色法は、上記第4章に順じて染色する。

第6章 シャリンバイ液による、うす色染色法

この染色は、縞糸や緋をシャリンバイ液で、うすく染色する方法である。これは、草木染法に順じて染色するが、これを石灰で媒染すると濃く染色されるが、後日変色するので、石灰媒染しないよう、明ばんで媒染すること。染色は20g/ℓの明ばん液で20～30分間操作、媒染して水洗い後、シャリンバイ液で操作染色して、目的の濃度に染色する。この1工程で染色されない時は、この媒染とシャリンバイ液染を繰り返して、目的の色に染色する。堅牢度を高めるため、乾燥蒸熱処理して染上げる。なお、緋を染色する場合は、ムラ染にならないように、糊抜きを十分おこなひ、染液ではもみ染等して、ムラにならないよう染色のこと。

第7章 カビの発生防止処理法

先に記したように、草木染は染色の不堅牢な問題もあるが、カビの発生が大きい問題であるから、草木染紬及び草木泥染紬は、必ずこの処理をすること。なお、この処理は紬の湯どうしによってある程度、脱落するので、この処理は湯どうし後にする方が良いが、大島紬の場合、加工の関係で織上げ後の処理は困難であるから、一応加工における処理法を記すことにしたい。

1. カビ防止剤F1による処理

ア 地タテ及び緋タテ糸の処理法

地タテは水洗い乾燥した糸、緋タテは総解きし、仕上げ準備した後、糊抜き水洗い乾燥した糸を、フノリ1.600ccにカビ防止剤F1を400cc(計2ℓ)にライトシリコン約60ccの割に混合した糊で、糊付け及び仕上げ加工して製織に移る。

イ 地ヨコ及び緋ヨコ糸の処理法

地ヨコは染色、乾燥後、緋ヨコは総解きし、揚粹した後、水洗い乾燥した糸を、水1ℓにカビ防止剤F1を1ℓ(計2ℓ)に、ライトシリコン約60ccの割に混合した液を、糸に浸ませた後、かるく手絞りして、そのまま乾燥する。

◦カビ防止剤F1の販売店

京都市中京区三糸通り小川西入 田中直 染料店

TEL 075 221 4112

備 考

上記の処理は、大量の糊や水量ですることなく、糸に糊や処理液が浸透する糊量及び水量で処理すること。（薬品節約のため）

第 8 章 草木染の堅牢度及びカビによる変色

以上のように同じ植物染料でも、媒染剤によって色が異なって染色される。これが、植物染料の特徴であり、又、草木染の面白さでもある。ところが、この草木染は、摩擦や熱湯には大体堅牢であるが、汗や日光、洗濯に不堅牢な欠点があり、又カビによる変色も欠点の1つである。又、この染色は、蒸熱処理や酢酸水処理、さらにはフイックスによる色止め処理でも、堅牢度の向上に大きい効果はなく、植物や染法によっても異なるが、一般的に見て堅牢な染料ではない。特に大島紬は、高価な織物であり、又、加工反数からして、16反が同じ色に染色するので、上記の欠点が発生したら、その損失や信用の失墜は大きいので、染色加工に当っては、色が良いからと直ちに紬に加工しないよう、植物を選び、堅牢度を確認してから、製品化するよう強調しておきたい。

又、従来の泥染紬も湿気や保管状態によって、カビが発生することがある。特に、地あき紬の黒地の部分に発生し易いので、このような紬は、カビの発生防止処理をすることが必要である。

このように、草木染紬はもとより、泥染紬もカビが発生することがあるので、湿気を防止し、梅雨明け等年1・2回、紬を陰干しして、カビの発生を防止するよう、消費者に周知する必要があると思います。